

19 世紀小説における〈少なすぎる〉子どもたち

猪熊 恵子

1. はじめに

Dickens 作品において子どもはしばしば、貧困や犯罪、制度的暴力にさらされる存在として物語の中心に置かれる。そして *Oliver Twist* や *Little Nell* など、大人の穢れた世界のなかで子どもらしい幸福を奪われる寄る辺ない主人公たちは、過度に理想化された子ども像をその身体に映し出しながら、大人と子どもの境界線を引き直す必要性を読者に強く訴えかけるように見える。Marah Gubar は、こうして大人によって他者化される「無垢な／無垢すぎる子ども」像を描く“Dickensian plots”こそ、後続の児童文学作家たちに乗り越え書き換えるべき土台を提供した、と論じている (8)。

しかし一方で Dickens の「子ども」像を、単に非力な存在への感傷によってのみ理解することはできない。Malcolm Andrews が指摘するように、Dickens の作品には「年寄りの顔をした幼児、子どもの心をもった大人」など、「大人」と「子ども」のあいだの境界線そのものを曖昧にする人物が数多く登場する (77)。また John Carey らが指摘する通り、子どもの教育に関する Dickens の記述は媒体や作品によって大きく異なり、一貫した子ども観として回収することが難しい (147)。つまり、「子ども」という概念集合の捉えがたさや揺らぎそのものが、Dickens という作家の書きぶりや作品の受容史に、そして彼の乱反射する「子ども」観にアレゴリカルに映し出されている。ひとまずはそうまとめることができるだろう。

2. 多すぎる子どもたち、少なすぎる子どもたち

この揺らぎを引き受けたうえで本稿は、曖昧に振れる「子ども」像を議論可能とすべく〈一組の両親から生まれ来る子ども〉という定義付けから出発したい。そして、Dickens 作品の内側と外側にはそれぞれ一体何人の「子ども」たちが存在するのか、という単純にして明快な問いに立ち返ってみたい。はじめにディケンズ周囲のリアルな世界を考えてみれば、彼自身は 8 人きょうだい、妻 Catherine は 10 人きょうだいであり、2 人のあいだには 10 人の子どもが生まれている。こうした例は、Victoria 朝期の人口推移を統計的に概括した Paul Morland の社会学的研究——「19 世紀初頭、女性一人あたりの出生数は生涯を通して平均 6 人のレベルまで上昇」し、顕著な人口増加が起こった (47)——を実証的に裏付けるデータと言えよう。しかし一方で、Dickens 作品の内側に焦点を絞ってみれば、そこに立ち現れるのは赤裸々とも思われる現実世界との非対称である。Oliver も Nell もおそらくは一人っ子、Nickleby 家は 2 人兄妹、Dombey 家は 2 人姉弟、David Copperfield は一人っ子なのである。

それではなぜ、現実社会の出生構造と、リアリズム小説内で反復的に提示される家族構成とのあいだに、顕著な非対称が存在するのだろうか。そもそも、小説内の「大人」がみな小説内過去にさかのぼれば必ず「子ども」であったことを考えれば、大人よりも子どもの登場人物が圧倒的に少ない Dickens 作品（および同時代の多くの作品群）は、小説内の時の経過と人口構成比にゆがみを孕んだ奇妙な世界ではないのだろうか。

興味深いことに Dickens 自身が、「人口」というテーマを明確に意識していたことを示す記述を、複数の作品内に見出すことができる。たとえば *A Christmas Carol* においては、Thomas Malthus が『人口論』で提示した「余剰人口 (the surplus population)」とその削減の必要性を、Scrooge が口にする (Stave 1)。また *Hard Times* の Gradgrind 家は、上述した〈一人っ子または 2 人きょうだい〉家庭のパターンを逸脱した 5 人きょうだい家庭だが、Thomas と Louisa 以外の子どもたちは Jane, Adam Smith, Malthus という名前を与えられている (Chapter 4)。とりわけ後者 2 つは個人のファースト・ネームとしては明らかに異質であり、人口の抑制、正しい人口コントロールによる国家統制、というテーマが Dickens の想像力のうちにたしかな位置を占めていたことをうかがわせる。

もちろんこれらの名づけや描写が、功利主義的価値観へのカリカチュアであることは間違いない。しかし少なくとも、現実世界において明確な人口増加の渦中に身を置いた Dickens が、自らの作品内で人口抑制のテーマを浮き彫りにし、子どもの数を間引くような世界を構築する、という非対称は、十分に分析に値すると言えよう。

3. *Holiday Romance* を読む

それではこの問題意識をもとに、ディケンズの晩年作品 *Holiday Romance* (1868) における「子どもの数」の展開に着目してみよう。アメリカの子ども向け月刊誌 *Our Young Folks* と、イギリスの大人向け週刊誌 *All the Year Round* 誌の双方に連載された本作だが、両者は「書く子ども」の主体性提示のありかたに興味深い対照を示しつつも、テキスト自体は完全に同一である。作品は 4 部から構成され、男の子と女の子が各々 2 人ずつ入れ替わりで物語を語る形式を採用する。4 人のあいだの物語リレー開始の背景については、最初の Part を語る William によって、以下のような説明が与えられる。ダンス教室で知り合った 2 組の男女（の子どもたち）は、第 1 部の

William と第 4 部の Nettie、第 2 部の Alice と第 3 部の Robin がそれぞれ熱烈に恋をして結婚を望む。しかしこれを大人に阻まれた結果、何でもかんでも禁止してしまう大人たちを正しく教育するため、子どもたちは大人のための教訓的な物語制作を思いつく。そしてこの提案者である Alice は続けて、物語制作を続けるうちに時が満ちて「妖精たちがあたしたちのところに、それは可愛いいたいけな子供たちを連れてきてくれる」日が来るだろう、と言う (AYR 159)。これらは、子どもの中に存在するロマンスへの欲望——できるだけ早く好きな子と結婚して新たな家庭を築き自らの子どもをもうけたいという欲望——として解釈可能だろう。

しかし Malthus の図式に照らせば、こうした子ども側の願いはあまりにも早すぎる生殖欲求であり、放置されれば必ずや世界の破滅に向かわざるを得ない欲望、でもある。したがってこの物語リレーは、そうした欲望を大人から挫かれた子どもたちが、その代替として自ら物語世界への移動を望む試み、として読み解くことができる。そうであるならば、この代替的な願望充足の物語世界のなかで、Malthus 的な人口抑制——ありていに言えば、子どもの数——がいかなる形で展開するかは、極めて興味深い問題、と言える。

第 2 部、Alice 自身の物語を詳しく見てみよう。7 歳の少女 Alice は、Alicia 姫という御伽噺のお姫様に自らを仮託して物語を開始するが、御伽噺の convention に則った彼女の語り内部において何よりも異彩を放つのは、7 カ月から 7 歳（これが最年長の Alicia 姫）まで 19 人の子どもがいる (AYR 204)、という家族構成である。一般に多くの御伽噺においては、子どものいない家庭に待望の赤ちゃんが生まれる、といった導入が多いのに対し、Alicia の語りと家庭環境はその導入部から、論理的に、または生物学的に、ありえないほどの多子家庭を映し出している。こうして、王様とお姫様とお姫様が登場する御伽噺の枠組みを忠実に再現した 7 歳の少女の語りは、その内部に壮絶な大家族の景色を照らし出し、それでいてその家庭構造の生物学的実現不可能性をあからさまに示すことで、逆説的にその御伽噺性を担保するような、不可思議なシーソーの上に載せられている。

続いて、Alicia の母であるお妃が病に倒れる描写もまた、この不可思議なシーソー構造を反復的に示している。通常、お妃の他界と高徳の姫君の受難へとすすむ一般的御伽噺の筋書きは、やはりここでも明らかにずらされ、お妃は特に病が進行することもなく、物語最終局で Fairy Godmother の力によって回復する。しかし子どもが「生まれ続けている」と語られる Alicia の家庭内 (AYR 204) で、この体調不良がお妃の 20 人目の妊娠によるものではない、と否定することは難しい。つまり端的に言って 7 歳の Alicia の物語世界には、一見して幼い少女が大人から読み聞かせられてきた御伽噺のパターンを従順に再生産する表層部分の向こう側に、〈過剰な出産〉〈強すぎる生殖力〉という生々しい身体性のテーマが見え隠れする。

最終的に物語は、あらゆる困難を乗り越えた姫が想い人の王子と結婚するところで幕を閉じる。しかしその結婚式で Fairy Godmother（この物語内では Grandmarina）が 2 人に与える祝福——Alicia は母をしのぐ「17 人の息子と 18 人の娘」を授かり、美しくて善良な子どもたちは皆、病気にかかることなく元気に成長する——はあまりにも示唆的、と言えるだろう (AYR 208)。つまり *Holiday Romance* 内部では、大人向けに書かれた Dickens 作品とは対照的に、まさに Malthus が提示した人口爆発の悪夢をそのまま具象化するような世界が展開する。

こうして Dickens が初めて子どもの声を使って書いた本作は、センチメンタルで他者化された子どもの姿からはかけ離れた、豊穡で強靱な力を持つ子ども、すでに大人たちの生殖の力と欲望を内面化し、新たな世代を無限に生み育て作り出すことへの意欲をみなぎらせた子どもの姿を前景化する。それでもこれを描き出す Dickens の背後には、子どもたちのこうした欲望と意欲を、あくまでも美しいお伽噺の枠組みの中にはめ込み、通常のルーティンからは離れた休暇の時期の物語 (*Holiday Romance*) という脇道にそっと置いておこうとする願望、言い換えるなら、子どもたちの強すぎる生殖力を野放しにすることへの恐怖もまた、垣間見えるように思われる。こうして *Holiday Romance* という作品は、〈書く子ども〉がテキストを産みだすとき、子どもの内なる力——それは決して大人が過去に失った麗しい理想ではなく、むしろ大人自身の現在の欲望に直結するような何か——を照らし出すこと、そして大人はそれを無力化したくなる欲望を抱えることを、見事に可視化するように思われる。

Andrews, Malcolm. *Dickens and the Grown-up Child*. U of Iowa P, 1994.

Carey, John. *The Violent Effigy: A Study of Dickens' Imagination*. Faber and Faber, 2008.

Dickens, Charles. "Holiday Romance." *All the Year Round: A Weekly Journal Conducted by Charles Dickens*, vol. 19, 1868, pp. 156–59, 204–08, 324–27, 396–99.

Gubar, Marah. *Artful Dodgers: Reconceiving the Golden Age of Children's Literature*. Oxford UP, 2009.

Morland, Paul. *The Human Tide: How Population Shaped the Modern World*. John Murray, 2019.

Trowbridge, Gail Hamilton, and Lucy Larcom, editors. *Our Young Folks: An Illustrated Magazine for Boys and Girls*. Vol. 4, Ticknor and Fields, 1868.